
笑顔のジョリー・ロジャー

海楼石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑顔のジョリー・ロジャー

【Nコード】

N3671F

【作者名】

海楼石

【あらすじ】

2人の海賊が上陸した島には海賊を捕まえられない海軍の乗少女何故その少女は海賊を捕まえられないの・・・？作者の勢いだけで生まれた痛快すぎる海賊ストーリー。

「「あ」う・・・あ」つ”い”いい・・・」

ジリジリと照り付ける太陽に完全に負けて船の甲板でぐったりとしている少女達が大海原に2人。

1人は真つ赤な長い髪のとびきりの美人。細い腰にはウエストポーチを着けていて、

その横には短剣を差している。

もう1人はぴよこぴよことはねる黒髪のショートヘア。露出度の高い服装をしていてズボンの上から

着けてある腰布にカトラスをぶら下げてる。

「ねえ、。。ティーシャ、。。海軍が居ようと構わないよ、。。次の島に上陸しよあ？」

と黒髪のほうが赤髪の方に話し掛けた。するとティーシャと呼ばれた赤髪の少女は

「そうね、。。。。上陸しましょう。そうと決まればさっさと進路を決めるわよ、マイムツ。」

そう言つて豪快に海図を甲板の床に広げた。2人は屈みこんで暫く海図とにらめっこ。

「この島は？」「此处は海軍がうろうろしてるって話よ？マイム、よく考えて？」

ここで気になつてる方もいるでしょう。彼女達が何故”海軍”をしきりに気にするか。

理由は簡単。ティーシャとマイムは”海賊”だから。たった2人の海賊団だが

海賊である事には変わらない。海軍に見つかったら捕まってしまう。その上2人は賞金首であるわけで。。。。おかげで海賊狩りや賞金稼ぎ達にも狙われる身。

迂闊な島選びは出来ない訳です。

暑いと騒いでいたわりには30分もかけて進路を決めた。

「此処がいいわっ。他の海賊から聞いた話ではこの島が一番海軍目撃数も少なく現在位置から近い」

「ティーシャが言うなら確実だね。行こーう！パズ島へ！」

*

その頃、パズ島ではマイム達を照り付けているのと同じジリジリとした日差しを

鬱陶しそうに睨み付ける綺麗な白い肌の少女。

汗で少しべたつとするふわふわした金色の髪を掻き上げながら

「こんな日差しのなかパトロールなんて肌焼けちゃうわよ！信じられない！」

とブツブツ悪態を吐いていた。すると海軍の制服と着たひよろりとした体形の男が近づいてきて

「准尉い。しっかりパトロールしてくださいー。でないと、僕まで怒られちゃうんですよおお」

嘆く部下を見て、少女は制服の青いスカートをひらつと翻して振り向き

「わーってるわよ！あたしは町の入り口を見てくるから、伍長わ海岸へ行きなさい。分かったわね？」

そういつて町のほうへスタスタを歩いて行ってしまった。

*

「ティーシャ、。、。なんで、。、。なんであたし達は今走ってるのー！？」

パズ島へ着いてすぐ、準備運動と言うには激しすぎる見事なダッシュを披露している2人の海賊。

はあはあと息を切らしながらティーシャは答える。

「逃げてるからよっ！それ以外なんの理由があるのよー！それよりもっと早く走りなさい！」

「ふえー。ここは海軍少ないって言うてたのにいきなり見つかったよおー」

船を泊めている時に海軍に見つかった2人は急いで船を縄で縛り付け猛ダツシュ。

で、今に至る訳である。

細く長い迷路のような路地。初めてパズ島に着たティーシャとマイムは完全に地の利が無い。

不利だ。

あつという間に追い詰められてしまつ。

「もー駄目だよー！ー！走れない！こどこ！もつ、イヤあつ、ングッ！？」

マイムは行き成り口を抑えられ、腕を掴まれたので驚き思わずティーシャの腕を掴む。

「ちよつ。ひゃあつ」

藁だらけの小さな小屋の中へと引つ張られ、カビくさい木製のドアはギギイとキレの悪い音を立てて閉まつた。

2人がそつと前を向くと海軍の制服を着たふわふわとした金髪の少女。真つ白な肌をしている。

そつ、先ほど太陽を鬱陶しそつに睨み付けていた海軍准尉の少女だ。

マイムはすぐに海軍である事に気づき、身構える。すると

「やめないさい。マイム。」

ティーシャはしっかりとした口調で落ち着き払って言った。

そして続けてこう言った。

「私達をかばってくれたんでしょ？よく聞いてなさいマイム」

口に人差し指を当てて「シーツ」のポーズを取る。

外の音に聞き耳とたてていると先ほどマイム達を追いかけていたひよろりとした海兵の声。

『向こうか！？逃がさないぞ！！！』

と言って小屋の前を通り過ぎて行ってしまった。

「ホントだ・・・」

信じられない！という顔をしながらマイムは金髪少女に視線を移す。するとマイムの視線に気づいた少女は綺麗な顔立ちでにっこりと笑

う。

「私はオリーヴ。ん、ゝ。まあ、見ての通り海軍よ。けど安心して。私、海賊は捕まえないの。」

そう言つて手招きをしながらそつと小屋から出て行つたので、2人はその後を付いて行つた。

10分ほど歩きつづけると赤いレンガ造りの屋根に白い壁の可愛らしい家。

周りをきよるきよるを見渡してからオリーヴはマイムとティーシャにもう一度手招きをして

家のドアを開けた。先ほどの小屋とは違いまだ塗料の匂が残っているほどの新しい家だ。

オリーヴはソファに2人を座らせ自分はキッチンへ入っていつて紅茶を淹れて来てくれた。

マグカップに注がれた琥珀の様な色の紅茶はマスカットの香りがする。

「わー！これマスカットダーズリンだね！村にいたときにお母さんがよくいれてくれた！」

マイムがマグカップを持ち上げて嬉しそうに言つた。

「あら。知ってるの？私もこの紅茶好きなの」

オリーヴは座りながら自分のマグカップも持ち上げて見せた。

「で、それより気になる事があるんだけど？」

ティーシャがオリーヴをじつと見つめながら落ち着いた口調で言つた。

するとオリーヴは薄汚れた一枚の写真がはいった写真立てをゆびさした。

「この写真の真中の男。私の兄なんだけどね。海賊なの。でも父は海軍大佐で兄が海賊に

断固反対だったの。兄は家を勝手に離れ海賊になった。そしたら自然に父親の怒りは私に向いたわ

私を海軍将校にするために父親は兄と海賊をいう生き物を憎むよう

に教え込んだわ。

たくさんの海賊をつかまえれば海軍のランクアップは確実だもの。
でも、。私は兄を嫌いにはなれなかったし本当は私も海賊になり
たかった。

だから、。私は海賊を捕まえない。だから後一步なのに
 尉どまり。あはは。。」

頬杖を着いて苦笑いするオリーヴと見てマイムは

「海賊になりたいなら、なればいいじゃんか！どうせなら一緒に行こうよー！」

と手を差し伸べる。ティーシャとオリヴが目を見開き差し伸べられた手を見つめる。

にーっと笑うその笑顔を信賴してもいいかな．．．。とオリーヴが思えたその時

バーンと大きな音を立ててさっきのひょろりとした男とはまるで

立派な体つきをした男が玄関のドアを開け入ってきた。

「誰!?」 ティーシャはバツと顔をドアへと向けた。

マイムとティシャには構わず男はオリーヴへと近づいていくと

「オリーブ、。また海賊を匿って海軍の恥じと思わんかった！」

「お父さん！私は本当は海軍になんてなりたくなかったっていったじゃない！」

「お父さん！！？？」

オリーヴはその男をお父さんと呼んだ、。　　ということは海軍大佐。
ヤバイ。捕まってしまう。

「2人とも！ここは逃げて！捕まってしまうわ。」

「やだ！オリーヴも一緒に行こう！」

「いいから行きなさい！！！！！！！！！！！！！！」

「断る！」

マイムはバットとオリヴの腕を掴み走り去った。

「ちょ！マイム！待ちなさいよお〜」

とその後にはティーシャも着いて行った。
走り去っていく我が娘と海賊達を大佐が逃すわけは無い。
ちっと舌打ちをして追いかけていった。

「は、2人共私も連れてきちゃってよかったの？追手の執着がすごいと思うわよ？」

息をきらしぐったりとする2人を見つめながら呟くオリヴ。

その声を聞いてティーシャはフフフッと笑い出し

「いいのよ。海賊は自由よ？誰をスカウトしようとも自由だもの」

「そうだよっ。それに誰にもオリヴの夢をさまたげる権利はない！」

そっいつて拳を突き上げる2人を見ていると涙と笑顔が零れ出た。

「そだね。じゃあ、もうこれもいらないや」

海軍の証である鮮やかな青いリボンを襟からしゅるっと音を立てて外すと

海け投げ捨てた。

そして綺麗な笑みを見せた。

「今から私達の仲間でいいの？後悔は？」

「ないわ！！！！」

3人は泊めてあった船へと乗り込んだその時

「待て。オリヴ。」

声に振り向くとオリヴの父親。なぜか怒りの表情が見えない上に悲しそうだ。

「お父さん、。あたしはもう海軍じゃないからね。

この2人と一緒に海賊になる！お父さんと一緒に行かない！」

船に乗ったまま動こうとはしない。

マイムはいざというときのため構えてる。

「ああ。分かっている。もう止めない、。さっきからのお前と海賊達のやりとりを見ていた。

悔いはないと答えたときのお前の顔。いままで一番に輝いていた、。

父親として娘の一番の幸せを考えるのは当たり前のことだった。いつてくるがいい。世界中を見て来い。帰ってきたその時はお前を暖かく迎えよう」

優しい笑顔をみせ娘を見送る父親にオリーヴは涙をながしながら「いつてくる！！いつかえってくるかは分かんないけど。立派に成長してみせるわ！！

さようなら、お父さん！！」

ゆつくりとすすんで行く船のなか島が見えなくなるまでずっとオリーヴは手を振っていた。

「いきおいでついてきちゃったけど、。これから仲間だね。よろしく！」

島が見えなくなり振り向き言った。

マイムをティーシャは顔を見合わせた後笑顔で

「当たり前だよ」

今日もジョリー・ロジャーはひらひらと青い空の下はためいている。元・海軍を交えたたった3人の海賊が乗った海賊船にはいつも笑顔が絶えない。

(後書き)

うん、ゝゝ。駄文ですね！。

海賊物が書いて見たい！！！！って勢いだけで書きちゃったのか悪かったですね。

初投稿でこれって先が思いやられるw

ストーリーも成り立ってない。

でもでも！アドバイスや評価が頂けたらうれしいです！
待ってます♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3671f/>

笑顔のジョリー・ロジャー

2011年2月22日22時52分発行